

# 「美しい」の多用はやめたい

美しいという言葉をやみに使いたくない。一ページに美しいが三つも四つもでてくる文章は読みたくないと思っている。

「美しい」が大切な言葉の一つであることは知っている。ただ、美しいという言葉に葉に逃げるのはやめたいといつも自分に言い聞かせている。

たとえば、秋の野道に露草や彼岸花が咲いている。そういう時「美しい露草が咲き、美しい彼岸花が咲いている」という文章を書く人がいたとすれば、その人は『美しい』という言葉に逃げている」といいたくなる。

山道に咲く一輪草を思うとき、「しろうくすずしく誇りかに／雲のとびかう嶺にさくを／一輪艸と申すなり」（三好達治）という詩を読めば、おのずから白い花の涼しげな姿が伝わってくるはずだ。

先日、北アルプスの山小屋に泊まった女性が、未明に起き、ご来迎を見るところをテレビが映し出していた。女性は涙ぐむような調子で、連れの女性に「お日さまが笑っていたね」といっていた。その言葉が今も心に残っている。「美しい日の出ね」では人の心に残る力がない。雲

間に昇る太陽の、地球上のすべての生きものをあまねく包み込む力を、彼女は「笑っている」と表現したのだろう。

ものごとを具体的に表現する気持ちがあれば、美しいという言葉に逃げず、それを超える描写をすることができる。

ものごとをより深く見詰め、感じ、より詳しく聴き、より繊細に味わい、より敏感に匂いをかぎとる力があれば、美しいという言葉に寄りかかることなく、いきいきとした表現を創りだすことができる。

ある景色を美しいと感じたとき、「美しい」と書いただけでは、その風景の個性や雰囲気は人に伝わらない。

「美しい」と書く前に立ち止まって、その風景、その草花がどのように際立って人の心を打つのか、そのところを具体的に書きたい。その風景、その草花のどういうところに魅力があるのか、どういう表現がふさわしいのか、それを探し抜いた上で言葉にしたい。探し抜くことに苦労するのが文章修業というものではないか。

作家、武田百合子は「美しい景色、

美しい心、美しい老後など『美しい』という言葉で簡単に使わないようにしたい」と書いている。賛成だ。

「美しい」だけではない。テレビで料理を口に入れる人たちが、なんとかの一つ覚えのように「おいしい」というのも気になるし、「粛々と対応する」というように粛々を連発する政治家にもうんざりする。ロンドン五輪の最後の日だったか、「史上最多、三八個のメダルです」を乱発していたマスメディアに鼻白む思いだった。

武田百合子は書いている。『美しい』という言葉がキライなのではない。やたらに口走るのは何だか恥ずかしいからだ」

## ●たつの・かずお

朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

